

探究を支えるということを探る

～自分の経験を振り返り、支えてくれた人を中心に考えてみる～

宮久保 雅行 (教職員支援機構)

1. 初めての NITS ファシリテーター

NITS に来て初めてファシリテーターをすることになった。場所は高知県。高知県が挑戦する探究型研修のファシリテーターの一人として、である。周りはずでに経験のある職員ばかり。行く前から職員にファシリテーターって何をするのか話を聞いても「参加者の語りを聞くことができればいいから」「大丈夫、何とかなるから」であった。

大学院生、大学職員のときにはワークショップを何回も開き、ファシリテーター役をやっていたのでファシリテーターのイメージはもっていたが、どうも様子が異なるなど感じた。私がもっていたファシリテーターのイメージは、場をつくり、参加者の考えを引き出しながらその場の意見をまとめつつ、プログラムを進行させることであった。

高知に行く前に少しでも学習しておかないと、高知県の先生方に失礼だと思って NITS にあった書籍を数冊読んだ。自分なりに大事だなと思ったことをまとめた参考書のようなものを作って当日を迎えた。当日はファシリテーター会議から始まった。当日のプログラムの説明やファシリテーターの役割等も説明されたが、正直何が求められているのかは分からなかった。何が分からなかったかということ、ここでも参加者の語りをしっかり聞くことが求められたこと。それは、ファシリテーターなのか？という疑問が拭いきれなかった。

もう一つ高知に来る前に学習してきたことがあった。それは、問いを考えること。問いを考えるポイントは書籍を読んでなるほどと思えたことに絞って考えようと思っていた。

研修開始。目の前にいる参加者の語りを聞きながら、自分が経験してこなかった話であったり、考えや取組が聞いた。学校の教職員という共通項はあっても色んな経験が展開されているんだなということを感じながら、同時に研修の目標に向かうようどのような問いを場に出せばいいんだろうと考えている自分がそこにはいた。まさに、自分がイメージしているファシリテーターとして振る舞おうとしている自分である。私が担当させていただいたグループには、NITS のファシリテーターを学ぶために他県から来ていた指導主事の方もいた。熱心だなあと思いつつ、見てわかるものなんだろうかとも思った。このグループでの活動で私の問いで明らかに一瞬場が止まり、参加者が考え込む時間があった。このとき、あっ、明らかに一瞬場が止まり、思考がグッと動く感覚を得た。なるほど、語り手が想定していないような視点からの問いは考えを巡らせるような力があるんだと思った。

その後、参加者からその視点は今まで考えたことがなかったとお話を聞いて、そのときは少しは参加者の学びに役立てたのかなと思った。見学されていた指導主事の方からも参加者の語りから問いかけることで対話が深くなっていくことが分かりましたと言っていた。

2. なんか違うかも

高知県の経験から、NITS のファシリテーターは語り手の話を聞きながら、研修の進行に沿った問いを投げかけて参加者が考え込む、あるいは、参加者自身の考えの枠に気付いてもらうように振る舞えばいいのかなと考えていた。その後もファシリテーターをさせていただく機会は多くあった。毎回ファシリテーター会議では、「上手いファシリテーターではなく、参加者の語りを聞くこと、一緒に学ぶ姿勢を大事に」という話が出た。2~3 か月も経つと、またか。というような感情になっていた。それでも毎回ファシリテートするたびに、参加者からモヤモヤしたけど楽しい時間だったと言ったような言葉をもらって安心していただいていたように思う。

ところが、である。学校管理職を対象とした NITS の探究型研修にファシリテーターとして関わらせていただいたとき、参加者から返ってくる言葉や反応が明らかにこれまでとは違っていた。参加者の思考や認識の枠組みに気付いてもらおうとする私の問いかけに対して、これまでであれば参加者は、その問いかけに対して考えたり、悩まれたりされていた。しかしながら学校管理職の方からは、私の問いかけに対して「なるほど」「そういう考え方をするのか」といった言葉が返ってきた。それは、参加者の語りを聞き、その方が気付いていないだろう（と、私が勝手に思い込んでいた）内面にある大切にしてきたこと（価値観）に向けて、半ば強引に考えさせようとコントロールを試みた私に対する言葉であったのだろうと思う。それでも私の問いかけに考えたり、話し合ったりはされていたので今回も何とか終わったなと思っていた。しかし、数か月後、オンラインでのインターバル研修で再開すると対話が成立しない。参加者は話す順番がきたら話はされるが、話終わるとだんまり。他のメンバーもマイクオフのまま質問や感想もなく、とても居心地の悪い沈黙の時間。別の研修でも沈黙する時間はあったが、そのときは参加者が考えたり悩んだりされている印象だったので、こちらから話すことはせず、話したいと思われまで待っていた。居心地も悪くはなかった。けれども、今回の沈黙はそれとは全くの別物であった。私の立ち振る舞いがこの場を作り出したのか、別の何かがあったのかは分からない。けれども、他のグループは対話が弾んでいたと聞いて、自分のファシリテートがこの場をつくっているのではと考えずにはいられなかった。結局インターバル研修は2回あったが、どちらも同じような雰囲気の中で研修は終わっていった。何とかしなければと思って、質問のようなこともしたし、感想も言ったし、問いかけもした。けれども、対話と言えるような場にはならなかった。グループメンバーの皆さん、ごめんなさいって気持ちと、学びの機会を奪うようなことをしてしまったと気持ちは沈んだ。

3. ファシリテーターについて語り合う

この経験から、他の NITS 職員はファシリテーターのことをどのように捉えたり、考えたりしてるんだろうと話を聞くようになった。その中でも、自分とは全然違う考えだなと思ったのは「参加者の語りは自分の学びになっている。話を聞くのが楽しい」といったことだった。それを聞いて心が動いたわけではないが、対話のときにはどんなことを考えながら語りを聞いているのか、どんなことを参加者に語りかけているのかといった会話を自然とするようになっていった。

NITS での最初のファシリテーターから半年以上経っていたが、結局のところ NITS のファシリテーターとは何なんだろうと整理できずにいた。

研修ではないが、NITS ではラーニングハブというワークショップのような学びの場がある。ある回、ファシリテーターとして参加したときのことである。教諭時代にこれは失敗だったな、今の自分の力ではあかんと思っていた不登校支援に全力で取り組まれている方がグループにおられた。自分の何が欠けているのか、どのような考えや判断が良かったのかなど、その参加者の方の話を聞きながら自分のこれまでを振り返りながら前のめりで話を聞いていたことに、会が終わってから何となく思い返していた。この人から自分はどのように考えたり、行動したらよかったのかを学ばせてもらおう。できることなら、もっと早く出会えていれば、とも思った。この感覚が「参加者の語りは自分の学び」なのかなと考えた。参加者の語りから学ばせてもらおうというような気持ち

で、その後何回かファシリテーターの機会もあった。当初の自分では考えてもいなかった考えではあったが語り手の話をしっかり聞いて、そこから自分の経験を振り返ったり、そんなものの見方や考え方もあるのかと、とにかく一緒に学ばせてもらうんだという心持ちで臨んだ。参加者の方に色々な気付きが生まれるようにとか、問いかけなければといった感覚は薄らいできて、心持ちも自然体になっているなあと、自分でも分かるくらい力を抜いてファシリテーターに臨んでいた。一方で、ファシリテーターって本当にこれでいいのか？これがいいのか？と違和感もあった。

4. その違和感は何ものか

NITS に来て1年が過ぎた。NITS のファシリテーターのことを考えねばならない状況になった。約1年かけて語り手の話はしっかり聞こう、一緒に学ばせてもらうんだと私自身の考えは徐々に変わってきた。対話というコミュニケーション方法のよさも何となく理解できるようになってきた。それでも、一緒に学ばせてもらおうだけでいいのかに引っかかる自分がいた。それはきっと、研修は参加者の学びの場であってほしいと思っているからではないか、そのためにファシリテーターがその役割の一端を担っているのに、学ばせてもらうんだという心持ちだけでいいのか、ということなんじゃないかと思うようになった。

昨年度末には、ファシリテーターはいらないんじゃないかと考えるようになっていた。なぜそう思ったかと言えば、参加者は自ら対話し、学ぼうとする姿をたくさん見てきたから。むしろ、NITS の職員がいない方が参加者は遠慮や忖度せず対話でき、対話も深まっていくのではないかとも思っていた。対話というものが広がればファシリテーターの役割も参加者に委ねることができて、ファシリテーターは不要になるのではないかと。

ではなぜ、NITS は今年ファシリテーターの研修を新たに設けたんやろう、この研修ではファシリテーターの何を学ぶんやろう、とずっと考えている。ファシリテーターのスキルを学ぶ研修？NITS 職員の代わりにファシリテーターをするためのファシリテーター養成研修？そうではない、もしそんな研修なら、自分が一番いらんと思うはず。もしかしたら、自分が引っかかっているところに大事なことがあるんじゃないかなと思うようになり、自分が探究的に学んでいたと思っている大学院生のときに周りの方がどのように接してくれていたのかを考えるようになった。

5. 探究を支えてくれていた人たち

真っ先に頭の中に思い浮かんだのは、当時、専攻科長をされていた大学教授。学生が探究的に学べるよう制度設計を中心的にされてきた方である。何でこの人が一番に思い浮かんだのかと自分の中では意外でもあったが、他者から学ぼうとする姿勢が言葉や行動からずっと感じていたからかなと思った。ただ、この方の授業を受けてきたわけでも、研究に携わったわけではない。でも、事あるごとに私も含む学生の学ぶ姿勢を喜び、学生のもつ力はスゴいんだと、学ぶ姿を見てくれていたし、私たちの学びを全て受け止めてくれていた。次に思い浮かんだのは、プロジェクトに関わってくださった企業で幹部をされている外部講師陣。答えはもちろん、直接的なアドバイスはされなかった。ただ、その表情はとても柔らかかった。直接関わりのない講師の方も頑張ってるようだねと常に気にしてくださった。そして、研究室の恩師。私たちのプロジェクトは恩師の専門外であったが、話はいつもずっと聞いてくださった。アドバイスが特にあったわけではないが、必ず私たち学生のやりたいを大事にしてくださり、できる環境をつくってくれていた。そして、仲間たち。私たちのプロジェクトはトータル5年近く続いた。その間、人も入れ替わりながらメンバー間の意識の差や留学生との価値観の違いから衝突しながらも前に進んだ。全員が一丸に、とはいかなかったが、常に自分が苦しいときには仲間と一緒に考えたり、行動したりしてくれていた。さらに、大学とは一切関係のない企業人。私たちの想いを聞き、その夢と一緒に叶えたいと会社にとっては何の利益にもならないはずなのにめっちゃ関わってくださった。反対に、こんな人にだけは自分はないと思った人も思い出した。人の夢を聞いて鼻で笑い、明らかに見下した感じで無理だと言った人たち。

6. もしかして、ファシリテーターって必要なんじゃないか

4月からずっとファシリテーターについて考えてきて、今年初めてファシリテーターをする機会に恵まれた。急遽代打でやることになったが、やるからには今までと少しマインドを変えてみようと思っただ。一つは、参加者の皆さんがもつ自ら学ぶ力を最大限信じること。自分の過去を振り返って関わってもらった人のことを思い返したからこそ、目の前の参加者の思いは全て受け止めていこうと思っていた。もう一つは、参加者の学びに関心を寄せて見ようとする。だから、ゆっくり語りを聞きつつ、一つ一つのセッションでどんな内容であったかだけでなく、こんな言葉が多く出てきてるな、今はこんな考えを持たれているなということをしてできる限り詳細に記録に残した。1日目を終えた段階ではこれまでと特に違った感じはもたなかった。一つこれまでと異なることは、参加者の語りを聞いて自分の中で生まれた問いについて、自分なりに考えてまとめたことであった。なぜそうしたのかは明確ではないが、考えたくなった。そして、次の日に私も問いが生まれたこと、そのことを考えたことを伝え、時間があれば私も語らせてとだけ言った。その日の参加者の対話はどんどん自分たちの考えに対して、それはなぜ？とかどうしてそう思っているんだろうって話になっていった。参加者のこの学びの時間を大事にしようとは思って、最後まで自分が考えた問いを言う機会はなかった。ただ、参加者の姿を見て私も一緒に考え合いたいと、ある意味肩の力が抜けた状態で対話の場に入れたのだと思った。ホームグループからクロスグループのセッションになり、またホームグループに戻られたときに、参加者から「グループの雰囲気って全然違うんですね。」「ファシリテーターのやり方も違いますね」という話が出てきた。ホームグループは対話の間にある沈黙の時間も、考える時間として大事にされると感じていましたといった話になった。クロスグループでの感想を聞きつつ、参加者に昨日からずっと皆さんそれぞれが大切にしている思いとか、同じような言葉がたくさん今日も出てきますねと、声をかけた。さらに、このグループで大事にしようとしている言葉もありますよねって話もした。加えて、その言葉に少しずつ2日間積み上げている言葉が加わって来ますよねってことも伝えた。参加者の反応はいまいちだった。本当ですか？どんな言葉ですか？といった感じの反応が返ってきた。意外に感じたが参加者は気付いてなかったようであった。なので、ゆっくり2日間を振り返ってみてほしい、ぜひ記録を取ってほしいとお願いした。画面越しではあったが、参加者の皆さんが2日間それぞれメモを取っている様子は見て取れたので、出てきていた言葉はあえて伝えなかった。ここで、気付かせよう、コントロールしようとして、参加者が気付かされるのではなく、インターバル期間の学びもあるので、じっくり考えてみて自ら気付くことに意味があるのだろうと思ったからである。このとき私は、確かに言葉が変化していることは自分の記録を見て実感できたし、それは、それぞれの参加者の考えに変化があったからなんだろうと思った。そして、ファシリテーターについて引っかかっていた違和感はいずれもこれかもしれないと思った。参加者の話を聞いて、自分は学ばせてもらった。だから、問いを立て、考えてみたいと思った。これは今までと変わらない。ただ、その人がどんな思いや経験を経て今この対話で話されているのか、やりたいと思っているのはどんなことか、どんなことに悩みをもつのかを考えて過ごしたことで、2日間の学びを辿ることができた。そして、このようなその人なりの思いや考えが少しでも分かったら一緒に考えていけるやんってことに気付いた。視界が少し拓けた感じであった。

ああ、これまで自分の学びを支えてくれた人たちはこんな感じやった。そして、さらに、その方々がそれぞれにできるやり方で応援してくれたんだなと改めて思った。その方々とは今お会いする機会もないが、不思議といろんな場面を鮮明に覚えているし、いくつもの学びの場があったと思える。ファシリテーターってそれだけ大きな存在なんじゃないか。そんな風にファシリテーターのことを思うようになった。自分の学びに直接的に関与するわけではないが、その学びの方向性を一緒に考えたり、人をつないでくれたり、受けとめたり、喜んでくれたり。ファシリテーターのことを考えていたはずが、いつの間にか自分のこれまでの経験とつながった。自分が教育の世界に来たのもそんな人たちのように自分になりたいと思ったからじゃなかったっけ？現実ほど遠いけど。今、考えが変わってきている。

研修にファシリテーターって必要なんじゃないか。